

白門経友会

コロナ禍の下の中央大学

年が改まりましたが、皆様ご健勝
でお過ごしでしょうか。

本年度の後期では一部で集合(対
面)型の授業も行えるようになり大
学に学生の姿が見られるようになって
いましたが、再びの緊急事態宣言
で原則オンラインとなり、キャンパ
スから学生の姿が消えました。以前
のような賑わいが戻るのはいかなり先
になるかもしれませんが、来年度は
新入生を初め、学生たちがキャンパ
スライフを多少なりとも味わえるよ
うなることを祈念します。



閑散とした多摩キャンパスで、着々と工事が進む
新棟(学部共通棟) | 1月撮影

さて、新型コロナ禍のために経済
学部が力を入れているゼミ活動はか
なり制約されることとなってしま
いましたが、そのような中でも、昨年
後半にはさまざまな取り組みがあり
ました。大学ホームページより一部
抜粋いたします。

◆唐成ゼミが二年間にわたる「銚子の観光
振興戦略に関する研究」の報告書を銚子
市に提出。 : 九月十四日

◆伊藤伸介ゼミが八王子の特産品でドレッシ
ングを開発。八王子経済新聞にも取り上
げられました。 : 十月

◆林光洋ゼミの学生が中央大学附属高で訪
問授業を行いました。 : 十一月四日

◆江川ゼミの学生が「アグリカルチャーコ
ンペティション2020」で審査員特
別賞を受賞。 : 十一月二十九日

◆「中央大学経済学部プレゼンテーション
大会2020」を、オンラインで開催
しました。 : 十二月十二日、十九日

◆赤羽ゼミが埼玉大学経済学部の井原
ゼミと共同でプロジェクト演習を行
いました(ご協力:三菱総合研究所
様)。 : 十二月二十六日

新型コロナ禍の授業

春に新型コロナ感染症で緊急事態
宣言が発出され、中央大学では前期
授業をすべてオンラインで行うこと
になりました。これはすべての教員
にとつて初めての経験で、戸惑いな
がら試行錯誤しつつ授業を進めてき
ました。今回はそうした努力の一端
を、江川先生、杜崎先生にお願いし
てご報告していただきます。

オンラインでの演習の取り組み



経済学部准教授 江川 章

演習は少人数で顔の見える関係を
基礎にして、アクティブラーニング
型の授業ができるという特性を有し
ます。こうした特性を発揮するため
には、学生間や学生・教員間でのコ
ミュニケーションが不可欠です。コ
ロナ禍では、このコミュニケーション
をオンラインで円滑にできるかど
うかが、演習の成否を分けるといえ
ます。

オンラインでコミュニケーション
を図るポイントとして、第一にオン
ラインツールの活用が挙げられま
す。本学はWebexのアカウン
トを取得・配布しましたが、私は使
い勝手の面でZoomを使いまし
た。第二にオンラインでのコミュニ
ケーションを図るスキルの向上があ
ります。グループワークや資料の作
成・共有などをオンラインで行うス
キルが必要です。第三に演習マネジ
メントの工夫が挙げられます。対面
ならば板書ができる全体討論を、オ
ンラインで実施しなければなりません。
以上は教員・学生が試行錯誤し
て取り組みましたが、多様なツ
ール利用やFD等にかかる本学のサ
ポートがもつとあればよかったと思
います。

なお、オンラインでのコミュニ
ケーションは、ある程度の対面型コ
ミュニケーションを前提に成立しま
す。その点で、対面型が全くなく始
まった一年生の入門演習ではコミュ
ニケーションをとることは困難でし
た。今後は授業とは別にコミュニ
ケーションを促進する措置を取る必
要があると思います。
(杜崎先生のご報告は四ページに掲
載しています。)

生い立ちと三十五年の軌跡(三)



ユーキャン株式会社
代表取締役社長
安藤 啓 (昭和43年経済学部卒)

◆新製品への契機

一九八六年の春、ある展示会場でピーカーの中に収められたPTC水中ヒーターが水を沸騰させているのを見た。ニクロム線ヒーターと違い水中ではハイパワーが出るが空気中では出力が十三分の一まで下がるため、空焚きしても火災にならない。私は「これはひよつとすると使えそうだな」と一瞬ひらめいた。

しかし量産化するには性能にバラツキがあり、これらを解決する為に研究開発を続けることとした。この結果、売上の方は三億円を越え、利益も一千万円を越えてきた。

◆アメリカへの進出

同年のある日、当社のオープンショーケース用超音波加湿器の評判を聞きつけたある商社から、アメリカへ輸出したいという申し出があった。日本では青果のショーケースに

超音波加湿器を取り付けることは一般的になっていた。しかしアメリカには微細な霧を噴霧する加湿器は無く、水をノズルで散水する方式が一般的だと言う。タイマーで制御するため、突然水が買物客の手を濡らし、不評とのことだった。とりあえずサンプルを一台輸出し米国の反応を見ることにした。そのときふと、会社を作ってまだ日の浅いUCANがアメリカへ輸出して大丈夫か?と不安がよぎった。

翌一九八七年、アメリカの試験の結果は良好とのこと、さつそく五台・十台と注文が入り始めた。その年の後半には月に五十台、百台と増えゆき、年間トータルで三百台以上の受注となった。一九八八年、アメリカ向け輸出はさらに増え、増産につぐ増産となった。

国内向け出荷も増えつづけ、さらに空調用加湿器も加わって工場はフル稼働が続いた。若い工場作業員達は徹夜で組立作業に追われる日々が続いた。売上は四億五千万、利益は二千万までになった。一九八九年に入ると、アメリカからの注文が毎月のように百台単位で入った。一九八九年五月シカゴ市内で開催された食品機械展(FMI)を訪れ

た。当社の製品を販売しているメイン州、ポートランドのB社は当社製ショーケース用超音波加湿器FT500型を展示していた。超音波でケース内に噴霧する方式のものは当社製のみで他は米国製のノズル式。明らかに当社製が注目を集めていた。私はアメリカでは今後増え当者製品は売れるだろうと思った。

その頃当社が以前から日本、米国双方に特許出願していた、超音波加湿器の制御方式に関する技術が一九八八年十月と一九八九年二月に二件特許になった。

従来のON・OFF制御方式よりもはるかに正確に湿度制御が行える比例制御方式に関する技術で時分割制御方式と位相制御方式である。超音波加湿器の制御方法としては世界に今まで無かった技術である。恒温温室や実験室などで使用されれば、化学薬品、食品、電子機器などの各種データがより正確に取れる。米国での需要が大いに期待できる技術である。

アメリカへの輸出が順調に推移していることに加え二件の特許取得に成功したことで、アメリカ市場への将来性は一層明るくなった。私は、やはり米国に工場を作ろうと考え

た。第八期の売上はさらに順調に推移し、遂に五億円を越えた。前途は洋々だった。

◆衝撃の事態を経てさらなる海外進出へ

この後PL(製造物責任法)にからむアメリカからの理不尽な訴訟への対応や、さらに英国からの訴訟などんでもない事態があったが詳細は文字数の関係から割愛させていただきます。いずれにしても結果的に米、英、韓の市場を失ってしまった。一方、この間も新たな技術開発を展開し、特許等もさらに数多く獲得してきた。そしてオランダ、イタリヤ、ドイツ等の海外での展示会や販売も進めてきた。

この三十五年間、当社は色々と良い勉強をして来たと思う。PL保険も掛けずに訴訟社会の米国で商売をすれば、どんなことになるのかよく判った。私はしかし、密かに捲土重来を期している。その為には会社の足腰を鍛えなければならぬが、これまで会社の資金面、人材面、製品面の充実に尽力してきたつもりである。本社工場も買い取り、工業用地も山梨県に一千坪買った。借金の返済も終わった。その資金を使って新

製品の開発が行えるようになった。人材も優秀な人が入社してくれるようになった。今や当社の製品は、海外に出しても恥ずかしくないものが揃っていると自負している。当社は海外市場開拓に向けて、再度挑戦する。YES YOU CAN!

◆「発明大賞」の受賞

お世話になった東京商工会議所の方から『「発明大賞」と言うのがあるから一度そちらに申し込んだら如何ですか……』と言われた。そこで空調機のドレンを真空で排水処理する「ドレンスリーパー」で申し込むこととした。この製品は空調機を天井に施工するにあたり、障害物が多くドレン配管が無理な場所でも簡単に排水が出来る装置である。

これが第二十四回発明大賞(公益財団法人日本発明振興協会・株式会社日刊工業新聞社共催、二〇一六年度)において、幸運にも発明功労賞に選ばれた。長年取り組んできたものづくりの技術が認められ、私にとっては大変名誉なことであり、会社設立三十五周年の記念すべき年に華を添えることが出来た。

この製品の研究をスタートさせたのは一九八八年頃、そして特許出願

したのが一九九一年十月である。この時期はアメリカでのPL訴訟がたけなわで、そのためにアメリカの代理店が倒産した時期でもあった。訴訟に対応しながらの新製品開発は相当つらいものがあつた。アメリカで当社を欠席裁判にかけ、日本の裁判所経由で資産の差し押さえをやられると倒産の憂き日にあうことになる。新製品の開発どころではなくなる。そんな窮状で開発したのが「ドレンスリーパー」であつた。

最初の特許出願から二十六年も経っている。今頃発明大賞を戴けるとは思ってもみなかった。ノーベル賞は論文発表から二十年、三十年経ってから価値が認められ、受賞に至ることが多いように思う。ノーベル賞になぞらえるのは不遜かもしれないが、私の発明もやっと世間に認められたようで素直に嬉しい。これからもっと世間のお役に立てるよう安くて品質の良い製品を供給していきたい。なおこれらの製品の開発にあたっては技術部の恩曾誠一社員に協力してもらったことを感謝し申し添える。

海外の展示会もミラノ、ニュルンベルク、フランクフルトと、冷凍空調業界の展示会に出展し、知名度も

徐々に上がり引き合いも増えてきた。特にフランクフルトの展示会では多くのブース訪問者を迎え、活発な商談が行われた。私は「これから輸出で伸びる」との思いを強くした。

◆終わりに

生前父は、自分がサラリーマンが性に合わなかったこともあり、私に「会社をやるなら早くやれ」と言っていた。自分が出来なかったことを私にやって欲しかったのかもしれない。天国で「よくやった」と言ってくれているのか「まだまだ」と言っているのか。もし今生きていてくれたら一緒に酒でも飲みながら聞いてみたいものだ。

母は金銭的に厳しい家計をやりくりし苦労していたが、いつも楽天的で明るく振る舞っていた。それが子供達には救いだった。一九八〇年三月、父が他界してから私は独立を決意した。そして翌一九八一年十二月、ユーキャン株式会社を創業したことは前に触れたとおりである。

あれから三十五年が過ぎた。目を閉じればその間のさまざまな出来事が次々と思ひ浮かぶ。長いようであり一瞬のようでもあつた。何度か会

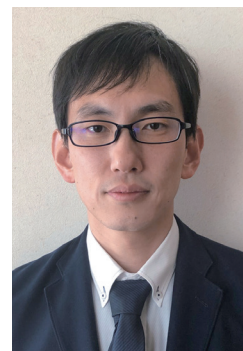
社が危機的な状況に陥ったり、健康を害して入院したこともあつた。しかし今になって思えばそれら全てを曲がりなりにも克服できたことは、不思議に何かの救いの手がそのときどき私に差し伸べられてきたように感じる。また今日まで三十五年間会社を経営してこられたのは両親が私を健康に生んでくれたお陰だと感謝している。これからも健康に留意して社の更なる発展を目指し、良い製品の開発に精進してゆきたい。

最後に今までユーキャン株式会社のために一生懸命働いて下さった全ての従業員の皆様、多くのお取引先各社様、会社創業時快く出資して下さった株主の皆様方、金融機関はじめご支援、ご協力頂いた皆様方から感謝を申し上げます。また、人望厚く、多大な業績を残して途半ばにして去世した私の実弟、安藤卓(元大阪営業所所長二〇一四年二月没)北村征司郎(元東京営業所所長二〇一二年八月没)の両氏に対し、心からの冥福をお祈りします。

完

※本稿は「ユーキャン株式会社の生い立ちと三十五年の軌跡(安藤啓考)」からの抜粋で、文責は会報の編集委員会にあります。

コロナ禍における学部での授業の様子



経済学部准教授 杜崎 群傑

昨年はまさにコロナ禍という未曾有の事態の中、学期が始まりました。私は通常、語学(中国語)と講義(アジア史)と演習を担当しておりますが、年度初めに全面オンラインと聞いたときは manaba も使ったことがなかったため、正直に言って戸惑いました。かといって学期の開始は待つてくれないので、三、四月は様々なツールの勉強に明け暮れつつ情報収集を行い、どのように通常に近い形で授業をしたらよいのか頭を悩ませる日々でした。学生側の設備や通信容量の問題を考えると、何ができて何ができないのか、特に一年生の語学は基礎編に必ず発音があるため、どうやって学習させるのか、不安が募る毎日でした。

唯一の光明は語学クラスでアンケートを行ったところ、全員が wifi 環境を整えてくれてい

たことでした。そこで前期はカメラをオフ、発言するときのみマイクをオンにすることで、なんとか授業が成立しました。

もう1つの懸案はアジア史でした。アジア史は前期の履修者数が一五〇人前後あり、通信容量を考えるとリアルタイムや動画配信授業は明らかに不可能でした。そこでICレコーダーを使い、事前にレジュメを配ったうえで音声のみの配信を行うことにしました。音声の質を落とせばそれほどの容量にならないことがわかったからです。

このようにしてなんとか乗り切った二〇二〇年度の授業でしたが、私としては不本意な内容だったというのが率直な感想です。語学では例年ある程度の在宅学習をしてもらってききましたが、しっかりと定着しているかどうか、今年は確認する手段がな

かったのです。必然的に、懸命に在宅学習した学生とそうでない学生の間に差がついてしまいました。またアジア史についても、一方通行のみであったため、学生の反応を見ながら授業を進めるということができませんでした。

演習についても、隣の学生との議論ができず、学生同士の連帯感という意味では限界があったと言わざるを得ません。何よりも教員側からすると、学生の生の反応が見れないとこんなに授業がやりづらいものかと痛感したものです。

ありきたりの表現にはなりませんが、日常は貴重なものだったのだとつくづく痛感した一年でした。むしろコロナ禍の状況次第でしょうが、早く教室で学生の生の反応を見ながら授業ができる状況になってほしいものです…。

編集後記

再び非常事態宣言が出されました。昨年は卒業式の日にキャンパスを訪れる卒業生たちの姿が見られましたが、今年はどうなるでしょうか。卒業生たちが中大での経験を胸にきざみ、大いに活躍されることを期待したいと思います。

また、本年度は、次の三名の先生方がご退職されます。(あいうえお順)

- 只腰親和教授(経済学史)
- 中川洋一郎教授(西洋経済史)
- デレク・マサレラ教授(英語)

残念ながら、送別の場をもつことはできそうにありません。この場を借りて、これまでの中央大学経済学部へのご貢献に対して感謝申し上げます。

(幹事長 濱岡 剛)

経済学部創立百周年記念奨学金へ募金のお願い(目標金額 6,000万円)

学生のキャリア形成を金銭面から後押しする「経済学部創立百周年記念奨学金」の原資が、三年後にも尽きようとしています。経済学部創立百周年に寄せられた篤志から創設され、以来十年間で約二百名の学生を後押しし、各々が大きな成果を挙げてきた本奨学金を、これからの学生たちにも同様の制度として継続したく、現奨学金への追加という形で皆様の支援を賜りたくお願い申し上げます。



募金方法や税制上の優遇措置など、詳しくはWEBサイトをご覧ください。中央大学ホームページの経済学部トップから黄色のパナーをクリック。スマホはQRコード読み込みでお進みください。

2021年1月22日 第77号
 発行 白門経友会常任幹事会
 編集 白門経友会編集委員会
 〒192-0393
 東京都八王子市東中野742-1
 中央大学経済学部内
 URL: www.wg-keiyukai.com
 Fax: 042-673-3425